

元・日本国有鉄道総裁、土木学会第66代会長

仁杉

NISUGI
Iwao

巖

さんに伺いました

聞き手

大内 雅博
元・編集委員

[writer] 駒崎 文男
[photo] 崔 健三

省エネルギーや地球温暖化への対応など、今何をすべきか、土木屋はもっと勉強して見識を高める必要がある。

2008年7月9日(水)
極東鋼弦コンクリート振興(株) 本社

普通のことを一生懸命にやっただけ

——このたび、わが国初のポストテンションPC橋である第二大戸川橋梁が国の有形文化財として登録される見込みです(本号発行時点では登録済み)。日本のコンクリート工学の父といわれる吉田徳次郎先生の一番弟子としてPC(プレストレストコンクリート)を究めてこの形式の最初の橋の設計と施工を指揮したのが仁杉先生ならば、東海道新幹線の名古屋幹線工事局長として用地買収を含めてわずか5年の工期で開業させたのも、そして国鉄総裁として分割民営化への道筋をつけたのも仁杉先生です。そのほか私鉄やFM放送の社長として幅広い業績をあげられました。その秘訣はなんだったのでしょうか。

仁杉——どんな場合でも自分の座標に従って行動してきた。これが秘訣と言えば秘訣かもしれない。まず、その仕事で何をしなければいけないのか。自分なりに一生懸命勉強する。次に、自分の経験によつて身に付けたルールを当てはめて判断をする。そして、普通のことを一生懸命やっていく。もし他の人と違うとすれば、僕にはそれが深かったのかもしれない。んね。

たとえば、大戸川の橋梁は、大雨によって流されてしまった信楽線のスパン10mの三連の鉄桁の橋を、PCポストテンション桁では一気に当時日本最長の30mの桁をつくって架け替えました。そのときに特別なことをやったわけではありませんが、さまざまな項目について徹底して予備実験をやりました。施工に際しては模擬型枠をつくって、どのようにすればうまく鉄筋を組めるか、バイブレータが入るかなど、細かく検討してから実際にコンクリー

トを打設しました。橋が完成した後も、荷重による応力や振動、クリープなど、必要なことは徹底的に全部確認しました。これらについては56頁に及ぶ論文を執筆しました。50年以上経った現在でもきわめて健全な状態を保ち、最近調査をした先生方からも、今のコンクリートと比べて非常に良い状態だとお褒めの言葉をいただきました。これらは普通のことを熱心にやった結果だと思っています。

国土計画には総合的な視点が必要

——仁杉先生は土木工学をどう定義されていますか。また、これからの土木が取り組むべき課題についてお聞かせください。

仁杉——最近、土木工学には二つの面があることを意識しておく必要があると感じています。一つは、コンクリートや鉄、橋梁、トンネルといった技術、ツールの分野。もう一つは、国土を



仁杉 巖 (にすぎ・いわお) さん プロフィール

1915年東京生まれ。93歳。1938年東京帝国大学土木工学科を卒業し鉄道省入省。国鉄常務理事、西武鉄道副社長、日本鉄道建設公団総裁を経て1983年から85年まで国鉄総裁。西武鉄道社長、FM埼玉初代社長を経て現在はFM NACK5取締役会長および極東鋼弦コンクリート振興取締役最高顧問。

どうしていくかという国土計画的な面です。

現在の国土計画では、道路は道路、鉄道は鉄道と分かれていて、それを総合してどうするかという視点が欠けています。たとえば、第二東名高速道路に線路が載せられれば東京―大阪間をエネルギー効率の良い列車で貨物を運べますし、CO₂の削減になります。防災や、地球温暖化や資源の枯渇への対応について、われわれはどう貢献していくか。土木屋はもう少し見識を高めるための勉強をする必要があると思うのです。

談合問題についても真剣に取り組み必要があります。建築とか土木は完成品を見て契約や取引をすることはできず、決められたプロセスを踏まなければなりません。プロジェクト

クトマネージャーやコンストラクションマネージャーを配置して、どんな技術が使われて金はどう流れたかを見えるような仕組みをつくる必要があります。そういう議論をしていくべきだと思っています。

国民が知らないのが一番の問題

——仁杉先生は約40年前、副会長時代に初代企画委員長として土木や土木学会の将来について議論を取りまとめられました。それは今日でも通用する内容だと思えます。

仁杉——その後何回もこういう提言がなされていますが、残念なのはいつもそれが実行に移されていないことです。その原因の一つは、会長

の任期が1年であるということです。私が副会長のときに、プレジデントエレクト(次期会長)という制度をつくりましたが、それでも何かを改革しようと思ったら、1年では短かすぎます。たとえば土木学会で、土木屋が何をすべきなのか、特に総合計画や請負の問題について、もっと突っ込んだ議論をしてほしいですね。

さらに、今一番大きな問題は、土木が一生懸命いろいろなことをやっているのに、それを国民が知らないということです。もっと国民にPRする必要があります。今の土木学会の体制でこうしたことをやれと言っても無理だと思えるのです。そのためにも会長の任期をどうするかということが土木学会改革のキーポイントだと思っています。

——93歳を迎えた現在も現役で活躍ですが、「長寿の秘訣はあるのでしょうか。」

仁杉——僕は仕事が好きなのです。だから、仕事上でストレスはあまり感じません。それと、これは性格なのでしょうが、いつも「人事を尽くして天命を待つ」という心境でいるということでしょう。とにかく好奇心をもって、一生懸命やる。人事を尽くし、ダメならしょうがない。それが僕の生き方の要領みたいなものです。ただし、人事を尽くさないのは嫌です。すけどね。

——仁杉先生の秘訣ではなく本質はそこにあるのだと思います。今後とも若い世代へのご指導をよろしく願っています。